イスラーム世界研究　第13巻（2020年3月）211–220頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 13 (March 2020), pp. 211–220

ガザル（3）――イクバールのウルドゥー詩（13）――

松村　耕光* 訳

はじめに

本稿は、ムハンマド・イクバール（Muḥammad Iqbāl, 1877–1938）のウルドゥー語定型抒情詩ガザル（ghazal）の翻訳その3である。

先々号（第11号）では、イクバールの第1ウルドゥー詩集『鈴の音（*Bāng-e Darā*）』（1924年）のガザルの部から12篇、先号（第12号）では、第2ウルドゥー詩集『ガブリエルの翼（*Bāl-e Jibrīl*）』（1935年）のガザルの部第1部から10篇、第2部から5篇、合計15篇選出して翻訳したが、今回は、『ガブリエルの翼』ガザルの部第2部から9篇、第3ウルドゥー詩集『モーセの一撃（*Ẓarb-e Kalīm*』（1936年）から4篇[1]、合計13篇訳出した[2]。

詩番号（1）は、『ガブリエルの翼』ガザルの部第2部の冒頭に置かれている詩で、ガズナ（Ghaznah）出身の有名なペルシア語の神秘主義詩人サナーイー（Sanā'ī, d. 1134）のカスィーダ（qaṣīdah）に倣って詩作したとイクバールが記しているので、ガザルではなく、カスィーダと見做すべきであるのかもしれないが[3]、ガザルの部に収録されているので、今回、訳出することにした[4]。

---

*　大阪大学大学院言語文化研究科教授

1）『モーセの一撃』には、ガザルは5篇しか収録されておらず、独立したガザルの部は設けられていない。

2）詩番号（1）から（9）までが『ガブリエルの翼』に、詩番号（10）から（13）までが『モーセの一撃』に収録されている作品である。

3）先回、註記し忘れたが、『ガブリエルの翼』ガザルの部にはマトラ（maṯla‘ ガザル冒頭の同一脚韻の2行）を欠いたものも含まれている（先号の詩番号10番、ガザルの部第1部の最後に置かれている）。

4）カスィーダとガザルとは同一の押韻形式（aa, ba, ca, …）である。Iqbal Academy Pakistan (Lahore) と National Book Foundation (Islamabad) とが編集し、ラホールから出版した『イクバール詩集（*Kulliyāt-e Iqbāl*）』（1990年）では、「ガザルの部（ghazaliyāt）」が設けられているが、ガザル詩型と同一の押韻形式やガザル詩型に近似している押韻形式の無題詩も含められているのではないかと思われる。「ガザルの部」と断っていないテキストもある。

(1)[5]

私の狂気はこの世界には収まらぬ
　おお、狂気よ、おまえが下した砂漠（せかい）の評価は間違っていた[6]
自我は色と香りのこの幻を打ち破ることができる
　それこそが唯一神（タウヒード）の教えであった――しかし、おまえも私も理解することができなかった[7]
おお、愚か者よ、目を覚ませ――顕現することこそ神の本性である
　海は波と無関係では有り得ない[8]
理性と叡智とを対立させるのは説教壇にいる者の過ちである
　彼は絞首台のハッラージを自分の敵であると思い込んでしまった[9]
神の従順な僕（しもべ）たちを――彼らが支配者であるときも、奴隷であるときも
　守ってくれる鎧帷子――それは自恃の心である
おお、天使ガブリエルよ、私の陶酔を真似てはならぬ
　安逸に暮らす天上界の者たちは神を称賛しながら神の周りを回っていればよい[10]

私は東洋、西洋の酒場を見た
　東洋には酒を注ぐ者がおらず、西洋の酒は旨くない
イランにもトゥーラーンにも最早見当たらぬ
　その清貧によって皇帝を倒していた者たちの姿は[11]
聖地の長は盗んでは売っている
　ブーザルの毛布を、ウワイスの弊衣を、ザフラーの被布を[12]

5）初句 Samā saktā nahīṅ pahnā-e fiṭrat mēṅ merā saudā.
テキストや注釈者によって連の分け方に違いが見られるが、本稿では Iqbal Academy Pakistan (Lahore) と National Book Foundation (Islamabad) とが編集した『イクバール詩集』のテキストに従った。
　1933年、アフガニスタン国王ナーディル・シャー（Nādir Shāh, d. 1933）の招きによりアフガニスタンを訪問した際、11月にガズナにあるサナーイーの墓廟を訪れたこと、この詩はその日を記念して書かれたもので、サナーイーの有名なカスィーダに基づいていることが詩の冒頭に註記されている（11月というのはイクバールの記憶違いで、サナーイーの墓廟を訪れたのは、10月30日である）。註記の後には「我らはサナーイーとアッタールの後を追って来た」という、サナーイーとアッタール（‘Aṯṯār, d. 1221?）に対する尊敬の念を表した、神秘主義詩人ルーミー（Rūmī, d. 1273）のものとされるペルシア語の半句が引用されている（アッタールもサナーイー同様、ペルシア語の代表的な神秘主義詩人である）。
　このアフガニスタン訪問（1933年10月20日、出発、11月4日、帰着）に関してイクバールは、ペルシア語で『旅行者（*Musāfir*）』というマスナヴィー（mathnavī）詩を執筆し、1934年に出版している。

6）信仰に溢れた者にとってこの世は活動の場としては不十分ということ。

7）「色と香りのこの幻」 この世界のこと。
「唯一神の教え（tauḥīd）」 イスラームを指す。

8）神は常に顕現しているのに、それが解らないのは、慧眼を持っていないからであるということ。

9）ハッラージ（Ḥalllāj, d. 922）は、「我は神なり」と述べたことで有名な神秘主義者。バグダードで処刑された。

10）ガブリエル（ジブリール Jibrīl）ら天使たちは私（人間）のように恋に陶酔することはできないということ。

11）「トゥーラーン（Tūrān）」 アム川以北の地域を漠然と指す。「イランにもトゥーラーンにも最早見当たらぬ」とは、どのムスリムの国にも見当たらない、ということ。

12）「聖地の長」 メッカの統治者。
「ブーザル」 清貧であったことで有名な、ムハンマドの教友アブー・ザッル（Abū Dharr, d. 652/3）のこと。
「ウワイス」 ムハンマド時代の彼の熱狂的な信奉者であったウワイス・カラニー（Uwais Qaranī, d. 657）のこと。

神の前で天使イスラフェルが私への不満を述べた――
　「この者は最後の審判の日が来る前に世界に大きな騒動を起こすかもしれません」[13)]
声がした――「世界最後の日の混乱にも劣らないではないか
　中国人たちが巡礼服を身に纏っているのに、バトハーの者たちは眠りこけている」[14)]
現代文明の酒瓶は否定の酒で一杯である
　酌人の手には肯定の盃がない[15)]
演奏者は巧みに抑えつけている
　西欧が出す悲しみの音はまだかすかである
この海には荒波が生じている
　鰐の巣ですら破壊されてしまうであろう

隷属とは何か？　美意識の喪失である
　美しいものとは自由の民が美しいと言うものである
隷属民の見識など当てにはならぬ
　自由の民の眼だけが見えている
今日を支配する者とは勇気によって
　時代の海から明日という真珠を取り出した者である
西欧の硝子職人は石を溶かしてしまったが
　私の霊薬は硝子を岩のように固くした
ファラオはずっと私を待ち伏せているが
　嘆くことはない――私の袖の中には白く輝く腕がある[16)]
枯草をかけたところで消えはしない
　神が葦原を焼くために生み出した火花は
愛とは自己凝視、愛とは自己堅持
　愛とは王宮に無関心であること[17)]
月や昴が私の獲物となっても驚くことはない
　偉大な御方の鞍の革帯に私は自分自身を結びつけている[18)]
あの道を知る賢者、最後の預言者、全世界の主は
　道の埃にシナイの輝きを授けた[19)]

「ザフラー（Zahrā）」 ムハンマドの娘ファーティマ（Fāṭimah, d. 633）のこと。「輝く者」の意。理想的なムスリム女性とされる。

13）「天使イスラフェル（イスラーフィール Isrāfīl）」 喇叭を吹いて最後の審判の日の到来を告げるとされる天使。

14）「バトハー（Baṯhā）」 メッカのこと。第2句はサナーイーのペルシア語の句の引用。

15）現代文明は神を否定し、神を肯定しないということ。

16）シナイの谷で神はモーセに語りかけ、モーセが投げた杖を蛇のように這わせ、腕を白く輝かせた（コーラン「ター・ハーの章」第22節、「物語の章」第32節）。「白く輝く腕がある」とは、イスラームに敵対する者に打ち勝つ力が神から授けられているということであろう。

17）「王宮」 現世的な栄華を意味する。

18）「偉大な御方」 イスラームの預言者ムハンマドを指す。私は預言者ムハンマドに服従しているということ。第2句はペルシア語詩人サーイブ（Ṣā'ib, d. 1677）の句に基づいている（一語変更されている）。

19）ムハンマドは無知蒙昧な者たちにも神の教えを授けたということ。
「シナイの輝き」 シナイの谷で神の光が顕現したことを指す。

恋と陶酔の眼にはあの方こそすべてである
　あの方こそコーランであり、正邪の基準（フルカーン）である――ヤー・スィーンであり、ター・ハーである[20]
サナーイーに敬意を表し、私は潜水しなかった
　この海には見事な真珠がまだ数多く残っているのだが

(2)[21]

隊長は不適格、隊列を乱す兵士たち
　ああ、弓を引いても当てるべき的がない
おまえの海には命の真珠が見当たらぬ
　波という波、貝という貝を調べてみたが
偶像を愛するのはやめ、自我に沈潜せよ
　偶像寺院の絵に夢中になるのはもうやめよ
あからさまに言えようか、死と恋の位階の秘密を
　恋とは名誉ある死、死とは名誉なき命と
導師ルーミーに親炙して私は秘密を知った――
　哲学者は頭を悩ませ、宣教者は首を差し出す[22]
闘いたいのであれば、「神と話す者」のようになるべきである
　今でもシナイ山の木から声がする――「恐れるな」[23]
西欧文明の輝きも私の目を晦ませることはできなかった
　私の黛はメディナとナジャフの土でできている[24]

(3)[25]

理性は館から離れてはいない
　しかし面会することは叶わない[26]

20）「正邪の基準（furqān）」 フルカーンはコーランの章名であり、コーランの別名でもある。
「ヤー・スィーン（yā sīn）」、「ター・ハー（ṭā hā）」 コーランの重要な章の名。意味不明の言葉であるが、神のムハンマドに対する呼びかけの言葉――ムハンマドの別名――であるとする説がある。「ヤー・スィーンであり、ター・ハーである」とは、「コーランでヤー・スィーン、ター・ハーと神に親しく呼ばれた御方である」という意味のようである。

21）初句 Gēsū-e tāb-dār kō aur bhī tāb-dār kar.

22）「導師ルーミー」 イクバールは、神への深い愛と動的世界観の持ち主であるとルーミーを見做し、大きな敬愛の念を抱いていた。

23）「恐れるな」 シナイ山で神が「神と話す者」モーセに向かって述べた言葉（コーラン「物語の章」第31節）。

24）「ナジャフ（Najaf）」 第4代カリフ、アリー（‘Alī, d. 661）の墓廟がある場所。

25）初句 ‘Aql gō āstāṅ sē dūr nahīṅ.

26）「館」 神のいるところ。

明敏な心を神に求めるがよい
　　目の光は心の光とは異なるのである
知識にも歓びはある
　　しかしそれは天女のいない天国である
何ということか、現代には
　　歓びに溢れた者が一人もいない
正気を失わぬ狂気もあれば
　　正気を失ってしまう狂気もある[27)]
生き生きした心とは我慢できない心のことである
　　ああ、我慢できる心など
死とは愛しい人に会えないことである
　　生きているのなら、会えないことはない
真珠は殻を破ったが
　　おまえは姿を見せようとはしなかった
「お姿をお見せください」と私も言うが
　　シナイ山のモーセのようになることはない[28)]

(4)[29)]

おまえは天地のためにいるのではない
　　世界がおまえのためにある、世界のためにおまえがいるのではない
理性と心とは愛の焔が発する火花である
　　理性は枯草を燃やすためにあり、心は葦原を燃やすためにある[30)]
この花園は溜息を育成する場所である
　　花見や巣作りのためにあるのではない[31)]
いつまでラーヴィー川、ナイル川、ユーフラテス川の中にいるのか
　　おまえの舟は無限の大海のためにある[32)]
星に道を示していた者たちは
　　今や道を知る者を求めている
高い理想、心を打つ言葉、情熱的な心――
　　これらが隊商の長に必要な資質である
アジャムの思想は些末なことを

27）「正気を失わぬ狂気」 熱狂的な信仰心を意味するようである。
28）シナイ山で神の光を見たモーセは気絶してしまったが、私は気絶しない（したくない）ということ。
29）初句 Nah tū zamīṅ kē liyē hai nah āsmāṅ kē liyē.
30）理性は一山の枯草を燃やすだけであるが、心は葦原全体を焼き尽くす。
31）世界は神への愛を育成する場所であるということ。
32）「ラーヴィー（Rāvī）川」 ラホールの近くを流れる川。

　　話を飾るために大きくしてしまった[33]
私の喉には天使ガブリエルすら感動させるような歌声があるが
　　それは物理的制約のない世界のために大事にとってある[34]

(5)[35]

万物は自己顕現に忙しく
　　高みを目指して足掻いている
顕現の意欲がなければ生は死に他ならぬ
　　自我を形成すれば大きな力が獲得できるのである
芥子種は自我の力で山となり
　　山は自我が弱まれば芥子種となる
星々は彷徨い、交わらぬ
　　孤絶こそ存在の宿命である
明け方近くの月は蒼白い
　　愛の秘密を知ることができなかったのである
おまえの心がおまえの灯火である
　　おまえ自身が輝きである
この世界に真に存在しているのはおまえだけである
　　残りはすべて幻である
この砂漠の棘が問題を解決してくれる
　　裸足であるのを嘆くことはない[36]

(6)[37]

哲学者に聞いたりはしない、私がどのようにして生まれたのか
　　私はずっと考えている、私は一体どこに行くのか
運命が決められてしまう前に――自我を高めよ
　　おまえの望みは何かと神が聞きたくなるほどに
私が錬金術師であることに議論の余地はない

33）「アジャム（‘Ajam）」 非アラブ地域、特にペルシアのこと。
34）「物理的制約のない世界（lā-makān）」とは、天上界のことであるが、自由に発言できる状況になれば発言したいことがあると言いたいのであろう。
35）初句 Har chīz hai maḥv-e khwud-numā’ī.
36）「砂漠の棘」 砂漠に生えている茨の棘。困難があるからこそ人間は努力し、発展できるということ。
37）初句 Khirad-mandōṅ sē kyā pūchhūṅ keh mērī ibtidā kyā hai.

ここに燃え盛る息がある――これこそが私の錬金薬である[38]
あの眼の中に運命の奥底が見えた
友よ、聞かないで欲しい――あの黛を付けた眼のことは
もしあの西欧の狂人が今生きていれば
イクバールは彼に神の位階について教えたであろうに[39]
早朝の歌声（なきごえ）が私の心を苦しめた
神よ、如何なる過ちのせいでこのような罰を受けるのか[40]

(7)[41]

自我が知識によって強まれば、天使ガブリエルも羨むことであろう
恋によって強まれば、それは天使イスラフェルが吹き鳴らす喇叭の音となる[42]
現代学問がもたらす厄災のことはよく知っている
私もこの焔の中に投げ入れられていた、「神の友」アブラハムのように[43]
隊商は宿営地に惑わされている
宿営地で休憩するより前進する方が心地良いというのに
眼識がないのなら、私の詩の世界にいてはならぬ
自我の真実は切れ味鋭い剣である
私は今でも西欧での教育を覚えている
逢瀬の歓びなどはなく、論証の覆いがかけられていた[44]
闇夜におまえは隊商からはぐれてしまったが
私の詩の焔はおまえを導く灯火である
聖地の物語は他に類を見ない――簡単明瞭であり、血塗れである
その終極はフサインであり、始点はイシュマエルである[45]

(8)[46]

38）自分の詩は人々に（信仰の）焔を与え、人々の心を変える錬金薬のようなものであるということ。
39）「あの西欧の狂人」ニーチェのこと。イクバールはニーチェの自己超克の思想に共鳴を覚えていたが、その無神論を受け入れることはできなかった。
40）「早朝の歌声（なきごえ）」早朝の礼拝時に神を想って発せられる泣き声。他人の泣き声とも自分の泣き声とも解釈できる。前者であれば、自分はどうして他人の苦しみを無視することができないのか、と、後者であれば、自分はどうして神から遠く離れてこの地上界にいなければならないのか、と嘆いていることになる。
41）初句 Khwudī hō ‘ilm sē muḥkam tō ghairat-e Jibrīl.
42）堅い信仰を持った者は世界を変革することができるということ。
43）偶像崇拝を否定するアブラハム（イブラーヒーム Ibrāhīm）はニムロデ（ナムルード Namrūd）王によって焔の中に投じられたが、神の加護によって無傷であったという伝承がある。
44）西欧の合理主義的教育では神に接する歓びを得られなかったということ。
45）アブラハムは子イシュマエル（イスマーイール Ismā‘īl）を神のために生贄にしようとした。ムハンマドの孫フサイン（Ḥusain）はウマイヤ朝支配に抵抗しようとしたが、680 年、カルバラー（Karbalā）の地で戦死した。
46）初句 Huā nah zōr sē us kē kō’ī girēbān chāk.

西洋人の狂気は人々の上着を引き裂かなかった
　　それは見事な狂気ではあったが[47]
確信の酒によって命の中核は焔に満ち溢れる
　　神よ、この燃える水を学林に与え給え
土から生まれた人間の発展を待ち望んでいる
　　銀河も、星も、蒼穹も
何という時代なのであろうか
　　頭脳は明晰であるのに、心は暗く、目は恥知らず
目が見えないのなら悟れない
　　信仰者は焔であり、世界は枯草であるということを
理性は道を照らす松明であると世界は思っている
　　しかし狂気も物事を理解することができるのである
全世界は真の信仰者に受け継がれる
　　このことは「汝がいなければ」の言葉が証明している[48]

(9)[49]

理性を持つ者よ、この朝夕の循環に己を失ってはならぬ
　　昨日も明日もないような世界が存在するのである
明日どのような騒動が起きるか、誰にも解らない
　　モスクも学院も酒場もずっと静かである[50]
早朝の涙の中に私は見出した
　　貝の中には見られない見事な真珠を[51]
新文明とは上辺だけ飾られたものに過ぎない
　　顔が輝いていれば頬紅売りの世話になどなろうか
演奏者は気を付けなければならぬ
　　間違った音でも玄界からの至上の音に聞こえることがある

47）恋の狂人は懊悩のあまり着ている上着を引き裂く。西洋人は熱心に活動したが、心に恋（信仰）の懊悩を生み出さなかったということ。

48）「汝がいなければ」「汝がいなければ私は世界を創造しなかったであろう」と神がムハンマドに語ったというハディースに基づいている。世界はムハンマドのものであるから、それはムハンマドに従う者たちに受け継がれていくということ。

49）初句 Khō nah jā is saḥr-o-shām mēṅaē ṣāhib-e hōsh.

50）イスラーム指導者も学者も神秘主義者も将来について考えていないということ。
「酒場」は神秘主義教団の修行施設を指す。

51）「早朝の涙」 早朝の礼拝時に神を想って流す涙。

(10)[52]

死んだ心は心とは言えぬ、蘇らせよ
　　それこそが諸民族の宿痾を治す薬である
おまえの海は静かである――凪いでいるのか、魔法にかかっているのか
　　鰐はおらず、嵐も起こらず、岸も崩れてはいない
おまえは天空の心が解っていない
　　星が目配せしているのにおまえは一向に心を動かさぬ
私の早朝の嘆きはおまえの葦原に投げ込んだのである
　　私の足裏の土に潜んでいた火花を
昨日と明日から成るこの世界の真実を理解するであろう
　　私のような慧眼を得た者は

(11)[53]

私はイランにもインドにも、イラクにもヒジャーズにも属さない
　　自我を通じて学んだのである、現世にも来世にも超然としていることを
おまえは私には異教徒に見える、おまえには私は異教徒に見える
　　おまえの信条とは息を勘定することであり、私の信条とは息を熔解させることである[54]
おまえは変わってしまった――聖法（シャリーア）を変えても当然である
　　鷹の掟は山鳩などには適さない
おまえが棲む荒野には狂気が見られない
　　事を成就させる方法を理性に教える狂気というものが
歌い手は人生の現実から目を背けてはならぬ
　　そうでなければ歌は同胞を殺してしまう

(12)[55]

目的地の手がかりを得るのは
　　闇夜にチーターの目を灯りとする者である[56]

52）初句 Dil-e murdah dil nahīṅ hai usē zindah kar dō-bārah.
53）初句 Nah maiṅ A‘jamī nah Hindī nah ‘Irāqī-o-Ḥijāzī.
54）長寿よりも信仰の炎を燃やし、イスラームのために行動することが大事ということ。
55）初句 Milēgā manzil-e maqṣūd kā usī kō surāgh.
56）「チーターの目を灯りとする」困難から逃げず、それを人生の糧とするということ。

時間があるのは奴隷たちだけである
　　自由な者に暇な時間などはない
西洋人の繁栄はおまえの目を晦ませている
　「汝は目を背けなかった」と言われた御方を目の守護者とすべきである[57]
酒杯が星のように瞬いている悦楽の宴など
　　すぐに終わってしまうであろう[58]
書物はおまえを無粋な人間にしてしまった
　　おまえはそよ風に薔薇の香りを感じなくなってしまった

(13)[59]

真珠は海にある――恐れを知らぬ大波よ
　　岸がくれる物とは、枯草や土埃に過ぎないのである
私の火花は稲妻のようなものである
　　しかしおまえの葦原は湿っている[60]
時代を作るのはおまえの力である
　　愚か者よ、天の力のせいにしてはならぬ
私は見たことがある
　　運命の裂け目を縫い合わせた狂気を
酩酊の道において完璧な者とは
　　葡萄に頼ることなく酔える者である[61]
東洋の酒場は今でも持っている
　　智慧を輝かせることができる酒を
具眼の士は西欧に失望している
　　その人々の心は清らかではないから

57）「汝は目を背けなかった」 コーラン「星の章」第 17 節を参照。「汝は目を背けなかった」と言われた御方とはムハンマドのこと。
58）西洋文明に言及していると考えられる。
59）初句 Daryā mēṅ mōtī aē mauj-e bē-bāk.
60）「私の火花」 私の詩ということ。
61）「葡萄に頼ることなく酔える者」 神への愛（信仰）に酔える者。